碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認　可
神奈川　碩　心　会　発　行

2年5月号（214号）
発行者
根岸岳萃
編集者
中村愛岳

2年5月現在会員数

逗子地区	155名
葉山地区	263名
大船地区	47名
（合計）	465名

再入門思いのまま

堀内支部・D　鈴木静山

私たちは日々の生活の中に、物質、精神両面の欲望をもっています。経済部門で成功しつつある日本人我々に、更に今求められているのは、充実した精神面満足の欲求が大きいようです。

碩心会会員数は、本年四月一日現在468名と記されていました。この方々は、詩吟の魅力に誘われて、それぞれ吟詠を楽しんでいられます。考えてみますと、この事が、実にすばらしいことと気づきました。会員の皆様は中年以上の方が多いようです。人生なすべきことに身を置き、誇高く生きつつある方、熟年を迎え、ひたすらに生きがい、楽しみにひたろうと、心くばりをしていられる方々です。

「将に今日如何に生くべきか」を模索しつつあるただ今、詩吟にめぐり会い、この奥深い芸能にひたっていられます。老化防止の願望もありましょう。

「趣味を持つことは、老化を防ぐ最良の医療」
……精神科医博・斎藤茂太氏
「頭は使用すればする程磨きがかかるもの」
……作家で医学者・渡辺淳一氏

詩吟は老化防止の足場をつくっていました。和歌、俳句を含め、漢詩はすばらしい文学です。読み味わえば、底知れぬ深さに、己の心の広まり、高まりを覚えずにはいられません。吟詠は又すばらしい声楽です。美しい音に敏感になることは人間のたしなみです。

師を交えての同好者の集まりの楽しさは、時の過ぎるを忘れることもあるではありませんか。非社交的で、生活を楽しむことが下手といわれる日本人にも、この誇らしい一面もあるのです。

吟詠から自然に学びとれる複式呼吸は、健康保持に良い呼吸法といわれます。吟ずる時の精神統一は、日常の生活に疲れて、乱れがちな情緒を実に自然に整えてくれます。吟じ終わった後のさわやかな満足感は、それ故と考えられませんか。

詩吟は私たちに、楽しさ、よろこび、生き甲斐等の心根をゆり動かし、活力を与えてくれるものと自賛し、会に入られる方を歓迎します。

碩心会発足の緒を作り、徐々に盛り上げて、今日の隆盛を招き、私たちの生活に大きな恵みをもたらして下さった先生方のご苦労に深く感謝いたします。

（平成二年一月再入会・二十余年空白）

準師範認許（平成二年二月四日付）

山口夕岳さん（大船A）が認許されました。
益々のご活躍を。

◎ 碩心会　理事会

とき・5月30日（水）午後6時30分より

ところ・桜山下会館

◎ 県本部　総　会（改選）

とき・6月24日（日）

ところ・平塚農業会館

第97回全国吟道大会参加

県本部 吟行会（碩心会参加者）

根岸岳萃　加藤岳相　沼田岳雷　中村幸岳
千葉剱岳　中村愛岳　森田暁岳　岩崎恵岳
杉山雪岳　森田嶺岳　矢嶋悦岳　村田瀞岳
渡辺秀岳　石渡桂岳　白井寿岳　白井麗岳
佐竹扇岳　高梨以岳　佐久間爽岳木村松岳
田辺伯岳　長島玉岳　安田聡岳　立沢御岳
重松由風　宇都宮徳風田中明風　松井正風
大屋正風　石戸倫風　鈴木深風　一柳良風
金子輝山　長島正山　榎　玲山　徳本華山
石黒恵山　森谷千山　高橋俊山　八尾昭泉
川瀬彗泉

皆伝合格（平成二年四月一日付）

おめでとうございます。

72浅沼典岳　74沼田悦岳　75清田蓮岳
90沼田静岳　92久保田伸岳93小林宝岳
94平山祥岳　92寺脇宇岳　96立沢御岳
97西岡晴岳

碩心会会員状況

（平成2年4月1日現在）　総務部

区分 / 段伝位別	男子 人員	男子 平均年齢	女子 人員	女子 平均年齢	合計 人員	合計 平均年齢
年少者（中学生まで）			3	13	3	13
無段～～～～～二段	21	63.5	67	65.3	88	64.9
初伝位	18	57.2	34	53.6	52	54.8
中伝位	26	59.9	82	59.0	108	59.2
奥伝位	51	64.5	76	61.8	127	62.9
皆伝以上	38	69.4	52	70.7	90	69.8
合計	154	63.9	314	61.8	468	62.5

総務部で上記一覧表を作成され、皆伝会の折発表されました。
総本部の全国平均年齢に比べると、碩心会はまだまだ若いですね。
がんばりましょう。

第2回　皆伝会開催さる

木々の緑も小雨にけむり、静かなたたずまいの堀内会館に於いて、4月22日（日）皆伝会が開かれた。皆伝者90名中、64名が参加した。まず受付でくじを引き、番号の席につき定刻11時、加藤圭岳先生の司会で始まった。開会の辞は小峯桜岳先生で、この堀内会館の前身は小学校で、自分もここに通われた事など懐かしそうに話された。つづいて竹石先生の先導で〝碩心会の詩〟が力強く合吟された

次に根岸会長から、去る神静地区選抜予選会の報告があり、残念ながら今回は機を逸したが、来年は是非頑張って欲しいと話された

そのあと今年の皆伝合格者と皆伝会幹事の紹介があり議題に入った。各地区長・部長報告をおわり、皆伝会の今後のあり方、碩心会の運営等についての意見をとわれたが、すぐには意見も出ず、おあづけとなった。

次に懇親会となり宇都宮先生へと司会が移り、三井先生の乾杯の後、地区毎の歌合戦で盛会となり、トリは根岸会長の豪快節に和して全員で歌い納め、加藤岳相先生の閉会の辞威勢のよい三本じめでお開きとなった。

幹事の皆様ご苦労さまでした。

岩崎記

温習会ウォッチング

連日の雨にうんざりしていたゴールデンウィークだったが、最終日の六日の朝は何かよい事あるごとしの朝のめざめ…まさしく温習会は久しぶりの好天に恵まれた。

（その1）

役員集合は8時45分…。しかしほとんどの準備は、集合時間までに終わってしまっている。まさに役員の方々（いや全員かも）の意気込みが伝わって来ます。

（その2）

千葉剱岳先生の先導で碩心会の大合吟。6本の高さで見事こなされた。一日も早く悲しみから立ち直られることを祈るのみ。

（その3）

碩心会最高齢者90歳の上山口支部鶯山祐風さん。見事に〝桜花の詞〟を合吟。又89歳の松和支部の武井桃風さんの見事な独吟〝舟中子規を聞く〟も高くて太い堂々たる吟声にただただ感心。お二人とも未だ花の如き青春…

（その4）

会場内は盛り上がり、熱気ムンムン。ちょっと騒がしくなり、進行係りからの注意に〝おしずかに〟の札をもったサンドイッチマン出現。ちょっと効果はあったかな？

（その5）

座席がたりなくて立見席出現に、臨時座席急造。それにしてもなんと物おき空席の多いこと…。会員以外の方も見えられたが、座席なしとも見受けられ、今後の課題。

（その6）

他の会にじまんしたくなるほどの合吟コンクール全チームのレベルアップぶりに錬成のあとがうかがえる。僅少差の次点以下のチームも来年がんばって！

（その7）

今年の役員メンバーの顔ぶれの中に、高齢の方が何人かいられ、生気溌剌と各部門の役をこなしていられた。その中のある人曰く〝生甲斐ですよ〟。高齢だから役員はとの思いやりも考えるべし。

（その8）

終了時間も計画通りピタリ。会場内のごみもなく整然。馴れた会場とはいえ、役員の方方の手際の良さはご立派。

上村記

合吟コンクール入賞

一位	一色A支部	677点	
二位	堀内支部・F	676点	
三位	真澄支部	675点	
四位	逗子A支部（男）	671点	
五位	〃（女）	663点	

訣別…愛妻の後を追うように獄死

妻は病床に臥し児は飢に泣く
身を挺して直に戎夷に当らんと欲す
今朝死別と生別と
唯皇天后土の知る有り

赤貧洗うがごとしというか、朱子学の教師をしていた梅田雲浜は、学問を教えるというよりも、儒教精神と尊皇攘夷を弟子に叩き込もうとしたから、よほど変わり者か、共鳴する者以外は一人去り二人去りして弟子は少なくなり、従って月謝による収入はやせ細る一方だった。

そのため妻の信子は持ってきた衣裳も次々に手放しやりくりしてきたが、あまりの貧しさと苦労つづきのため、とうとう病床に臥す身となった。信子と生まれてまもない長男繁太郎の看病をしたのはこの時十歳のお竹だった。久しぶりにわが家に帰ってきた雲浜はあまりのことに絶句した。「妻は病床に臥し」と詠じたのはこの時である。そして貧苦と栄養不良のためやせ衰えた信子は、当時でいう労咳結核に冒され二児を残し、29歳の若さで世を去っていった。尊攘精神をつらぬいた雲浜はそれから三年後、安政の大獄で捕えられ獄中で病死して信子の後を追った。

練吟メモ

漢詩余話

○ 芳　野（教一・36）　藤井　竹外

古陵の松柏天ぴょうにほゆ
山寺春を尋ぬれば春寂寥
眉雪の老僧時に掃くことをやめ
落花深きところ南朝を説く

右（常用漢字使用）の詩は、ご存じ芳野三絶の一。しかし、唐の詩人の次の五言絶句があることを知っておいてよいと思う。

行宮　　元　微之

寥落たり　古行宮
宮花　寂ばくとして紅なり
白頭の宮女　在り
間坐して　玄宗を説く

〔通釈〕人気のないひっそりとした行宮がある。お庭の花は昔ながらの紅に咲きほこっているけれども、今はそれを愛でる人もなくさびしげである。そこに一人の宮女、かつては美人であったろうに、今はもう白髪の老女が、折から訪れた私に対し、ゆったりと坐って、ありし昔の玄宗皇帝について、いろいろと語り聞かせてくれた。

○説明するまでもなく、前掲「芳野」、特に「眉雪の老僧時に掃くことをやめ、落花深き処南朝を説く」は、後の「白頭の宮女在り、間坐して玄宗を説く」の句から脱化したものであることは明白である。これに関してとやかく評する向きもあるが、本邦詩歌の世界においては、平安朝から鎌倉時代にかけて「本歌取り」と称し、盛んに行われていた作歌の一手法であった。だからそのまま素直にうけとればよい。事のついでに後一題例示したい。

○ 偶　作（教一・19）　武田　信玄

おう殺す　江南十万の兵
腰間の一剣　血なおなまぐさし
じゅ僧は知らず　山川の主
我に向って　いんぎんに姓名を問う。

〔通釈〕南方諸国を攻略して十余万の兵を皆殺しにした。腰の刀は未だに血なまぐさい感がする。ところが小僧は、この私が甲斐の国主であることを知らず、私に向って丁寧に姓名を尋ねるのであった。

○　　明　太祖

おう殺す江南百万の兵
腰間の宝剣血なおなまぐさし
山僧は知らず英雄漢
只おそるおそる　姓名を問う。

「偶作」は、信玄の作でないとする説と、たまたま数人の家来とともに鷹狩にでも出た折か、微服して領内視察の際のことを戯れに詠んだものであろうとする説がある。

さあ　読んでみましょう

燻れ1/15　禪榻1/17　曝殺1/19　豎僧1/19　慇懃1/19
嬋娟1/23　矮籬1/25　鳴砧1/26　若為1/32　両鬢1/33
抔土1/34　天驥1/36　篷窗1/37　摧れ1/48　蹇蹇1/50
奚ぞ1/50　虔む1/52　攀じ1/54　琅玕1/56　謗る1/57
嗤う1/57　賈船1/58　鸞輿1/60　瞥見1/66　屬鏤1/70
四簷1/72　竊む1/74　嘶き1/76　鼓喧闐1/81
蘊結1/85　鏃1/86　鋩1/86　妖氛1/86　旧鑿1/86
龍堆1/100　戍楼1/101　抃水1/105　宮牆1/105　煬帝1/105

（入　会）

567 下村佳子　逗子市桜山五―六五二
（逗子A）電〇四六八―七三―〇二八九
568 福田義一（ヨシカズ）　横浜市中区錦町五
（松　和）　ポートハイツ2―202
電〇四五―六二二―六七九〇

（退　会）

161 菊池隆風（銀　詠）
216 井上順風（銀　詠）
261 加藤祥風（一色A）
364 角田照泉（沼　間）
392 阿部桂山（一色A）

テレビ等で大型連休の人の動きをさかんに報道していたが、何かと忙しかった私には関係なく、アッという間に連休は過ぎ去った。それにしても豊かな時世となったもの。嫁入当時お正月の薮入りが私の唯一の休息だったことを思い、何と変わったことか。